

---

## 第2章 精神保健福祉援助実習における実習指導の効果及び 実効性に関する現況～調査結果からの分析・考察～

---

### 1. 調査目的及び方法

精神保健福祉援助実習指導がどのような効果をもたらし、その後の実践にどのように影響しているか、その実効性を明らかにすることにより、今後の実習指導のあり方をより明確にすることを目的とした調査を実施した。調査期間は2010年1月で、調査対象は社団法人日本精神保健福祉士協会（以下「本協会」という）の構成員であり、かつ精神保健福祉士国家資格登録から2年以内と思われる、本協会への登録から2年未満の現業者の全数300名とした。自記式無記名調査用紙を郵送により送付した。

質問項目は回答者の基本属性のほか、主たる実習先の機関種別、主に経験したプログラム内容、実習事前オリエンテーションの有無、事前学習の内容とその方法、実習スーパービジョンの有無とその内容、教員巡回指導の時期、特定の利用者を対象としたアセスメントや事例研究の有無、個別担当に対する私見（メリット・デメリット）、実習に対する満足度、実習目標や課題の達成度、実習中の困惑や悩みの有無、実習指導において扱われた中心的な内容、実習の前後比較をした際の変容度合い（回想）、実習を通して最も重要と感じた精神保健福祉士の「業務」、現在最も重要と感じている精神保健福祉士の「業務」、実習を通して最も重要と感じた精神保健福祉士の「視点」、現在最も重要と感じている精神保健福祉士の「視点」等である。それぞれの項目に選択肢および自由記述欄を設けた。

### 2. 調査結果

質問紙郵送法により回答を求めたところ、回答数は106で、回収率は35.3%であった。

#### (1) 基本属性等

図1に分析対象の性別を示した。性別では、「男性」が37名（34.9%）、「女性」が69名（65.1%）であった。図2には分析対象の年齢を示した。「25歳未満」の年齢層が34名（32.1%）と最も多く、次いで「25歳～30歳未満」が28名（26.4%）となっている。

表1には、分析対象者の所属機関を示した。「精神科病院」が43名（42.2%）と最も多く、精神科診療所の11名、総合病院の8名を加えると、60.8%が医療機関に勤務していた。図3には、精神保健福祉士以外に有している資格を示した。「社会福祉士」を有している対象が56名（54.4%）と最も多く、次いで他に「なし」が31名（30.1%）であった。図4には、卒業した精神保健福祉士の受験資格を獲得した養成校の種別を示した。「福祉系4年生大学」との回答が51名（49.0%）と最も多く全体の半数近くを占めているが、通学・通信制（一般・短期）養成校において受験資格を取得した者も51名（49.0%）と同数であった。

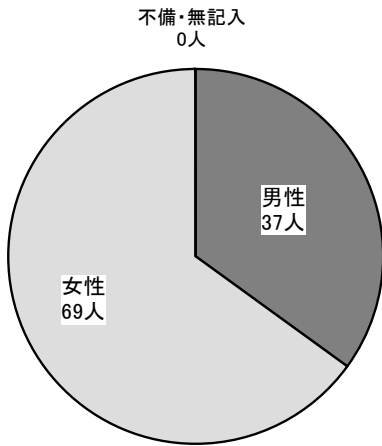


図1 性別

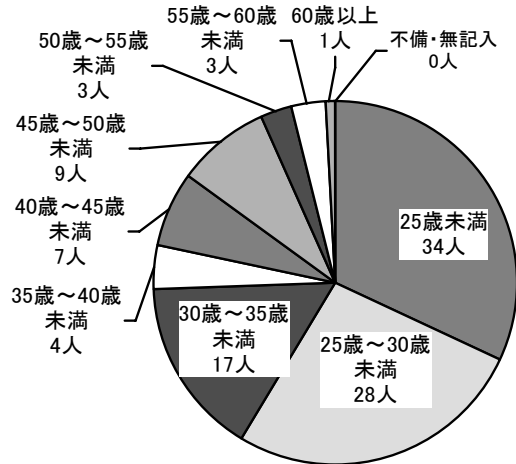


図2 年齢

表1 所属機関

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効				
精神科病院	43	40.6	42.2	42.2
総合病院	8	7.5	7.8	50.0
精神科診療所	11	10.4	10.8	60.8
精神保健福祉センター	1	.9	1.0	61.8
地域活動支援センター	9	8.5	8.8	70.6
福祉ホーム	1	.9	1.0	71.6
グループホーム	2	1.9	2.0	73.5
ケアホーム	1	.9	1.0	74.5
就労移行支援事業所	2	1.9	2.0	76.5
就労継続支援事業所	6	5.7	5.9	82.4
授産施設	2	1.9	2.0	84.3
生活訓練施設	6	5.7	5.9	90.2
地域生活支援センター	1	.9	1.0	91.2
小規模作業所	2	1.9	2.0	93.1
高齢者関連施設	1	.9	1.0	94.1
相談支援事業所	4	3.8	3.9	98.0
地域包括支援センター	2	1.9	2.0	100.0
合計	102	96.2	100.0	
欠損値				
システム欠損値	4	3.8		
合計	106	100.0		

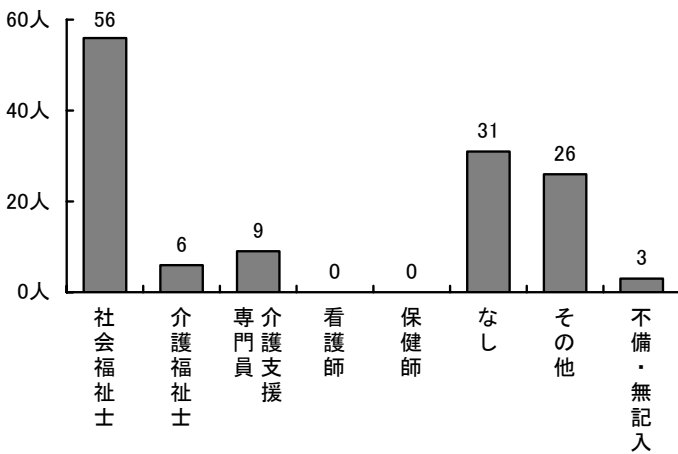


図3 精神保健福祉士以外の所持資格

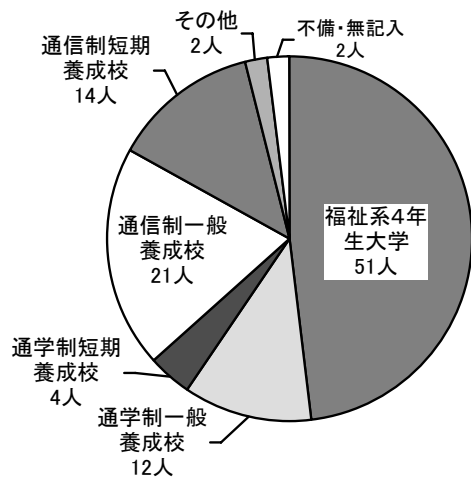


図4 卒業した養成校の種別

## (2)分析対象者の現場実習体験

表2には、主たる実習先機関種別を示した。51名(53.1%)が「精神科病院」と回答している。地域に所在する諸機関で実習を行った者は31名(32.3%)であった。図5には、実習実施箇所の数値を示した。59名(62.8%)が「1か所」と回答し、29名(30.9%)が「2か所」と回答している。

図6には、実習期間を示した。「12日」との回答が最も多く49名(52.1%)であり、「23日以上」という回答が38名(40.4%)と続いている。図7には、実習形態を示した。78名(82.1%)が「連続通所」と回答しており、「断続的に通所」の8名を大きく上回っていた。

図8では事前学習の有無を示した。単独項目では「養成校及び実習指導者から示された内容以外に自己学習した」が39名(41.9%)と最も多かったものの、「養成校及びスーパーバイザーから示された内容のみ自己学習した」「養成校から示された内容のみ自己学習した」を合わせると44名(47.3%)との結果が示されていた。図9には、実習事前オリエンテーションの有無を示した。87名(91.6%)が「あった」と回答している。図10には、事前訪問の内容を示した。最も多かった項目は「事務連絡」であり73名(83.9%)が回答している。次いで、「就業規定・施設概要」という項目が58名(66.7%)、「実習計画の確認」「実習日時の調整」と続いている。

図11には、実習開始後オリエンテーションの時期を示した。60名(64.5%)が「実習初日にあった」と回答しているが、「実習中盤にあった」が15名、「特になかった」との回答は17名に及んでいた。図12には、実習プログラムの有無を示した。61名(65.6%)が「事前に作成されていた」と回答する一方で27名(29.0%)が「特になかった」と回答し、「希望して作成してもらった」とする者は5名いた。

図13には、医療機関における実習経験プログラムを示した。68名が「病棟・デイケア等での利用者とのコミュニケーション」と回答し、次いで、58名が「精神保健福祉士の業務の説明」と回答している。図14には、施設・行政機関における実習経験プログラムを示した。「施設・機関の機能の説明」「利用者とのコミュニケーション」の2つの項目がともに42名と最も多い。但し、「医療機関」「施設・行政」とともに実習経験プログラム回答における欠損値が高いため、これら項目に関しては比率の記載を控えておくこととした。

図15は、スーパービジョン時における実習記録の活用方法を示した。「コメントがあり、かつ振り返りでも取りあげられた」が78名(83.0%)と最も多い回答であった。図16では、スーパービジョンの頻度を示した。44名(46.3%)が「1日1回」と回答し、18名(18.9%)が「数日に1回」と回答している。図17には、スーパービジョンの時間を示した。58名(61.7%)が「数10分」と回答している。次いで、28名(29.8%)が「1時間くらい」と回答している。図18には、実習期間中における実習生の数を示した。「1人」との回答が45名(47.4%)であり、「複数」との回答が39名(41.1%)であった。

図19には、実際の教員巡回指導の時期を示した。「実習中盤くらい」との回答が73名(81.1%)と最も多く、次いで「実習終盤くらい」が12名(13.3%)であった。次に回答者が適切だと考える教員の実習巡回時期について尋ねると、85名(89.5%)が「実習中盤くらい」と多数を占めていた(図20)。

図21には、特定の利用者へのアセスメントや事例研究を行う、いわゆる「個別担当機会」の有無を示した。「特定の利用者との関わりを特に持たなかった」との回答が37名(39.4%)と最も多く、次いで「関わりを多く展開したが、事例研究は行わなかった」との回答が35名(37.2%)であり、「特定の利用者を対象として事例研究を行った」という回答は21名(22.3%)に留まった。

図 22 には、体験した実習の満足度を示した。「とても満足した」との回答が 41 名 (44.1%)、「おおむね満足した」との回答が 36 名 (38.7%) であり、回答者の約 8 割が一定の満足を得たと回答している。一方で「あまり満足しなかった」との回答も 12 名 (12.9%)、「不満が残った」が 4 名いた。実習目標や課題の達成度合いを聞いてみたところ、「達成された」が 6 名 (6.3%)、「おおむね達成された」という回答が 47 名 (49.5%) である一方、「どちらともいえない」という回答が 32 名 (33.7%)、「あまり達成されなかった」が 9 名 (9.5%) に上っていた (図 23)。

表2 実習機関種別

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント	
有効	精神科病院	51	48.1	53.1	53.1
	総合病院	5	4.7	5.2	58.3
	精神科診療所	6	5.7	6.3	64.6
	精神保健福祉センター	1	.9	1.0	65.6
	地域活動支援センター	11	10.4	11.5	77.1
	就労移行支援事業所	2	1.9	2.1	79.2
	就労継続支援事業	1	.9	1.0	80.2
	授産施設	9	8.5	9.4	89.6
	生活訓練施設	3	2.8	3.1	92.7
	地域生活支援センター	4	3.8	4.2	96.9
	小規模作業所	1	.9	1.0	97.9
	相談支援事業所	1	.9	1.0	99.0
	社会福祉協議会	1	.9	1.0	100.0
	合計	96	90.6	100.0	
欠損値	システム欠損値	10	9.4		
合計		106	100.0		

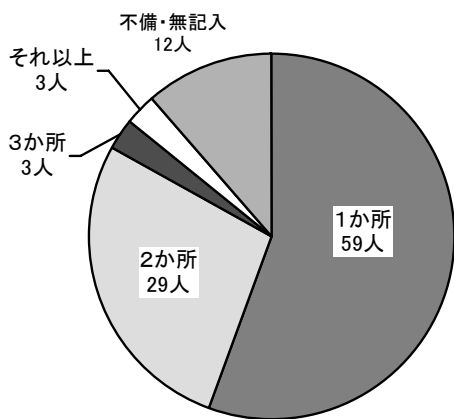


図5 実習先の数

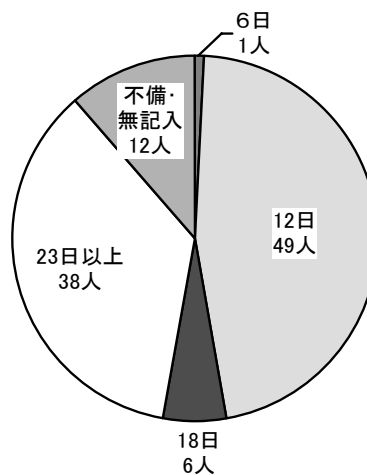


図6 実習期間

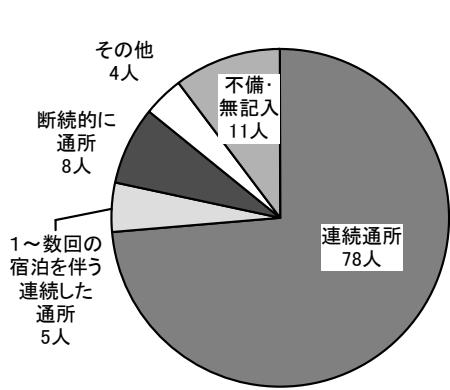


図7 実習形態

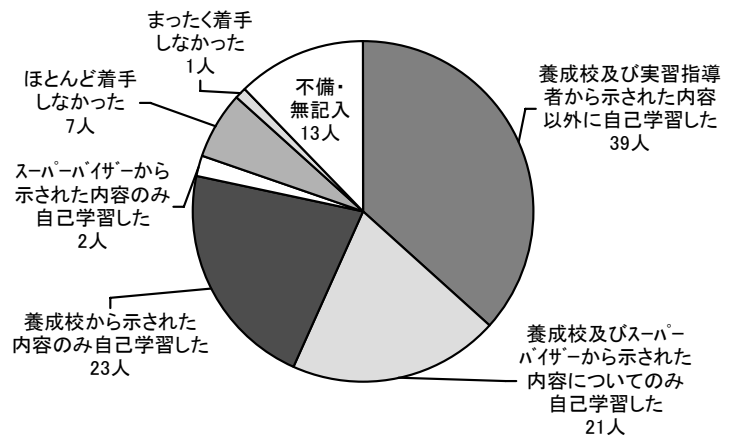


図8 事前学習の有無

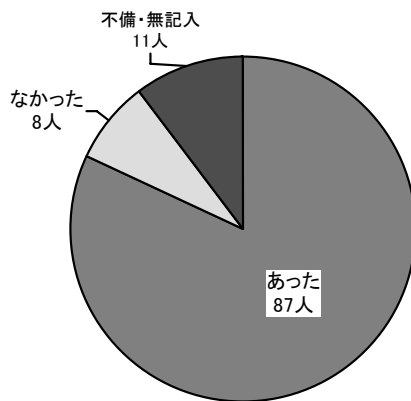


図9 事前オリエンテーションの有無

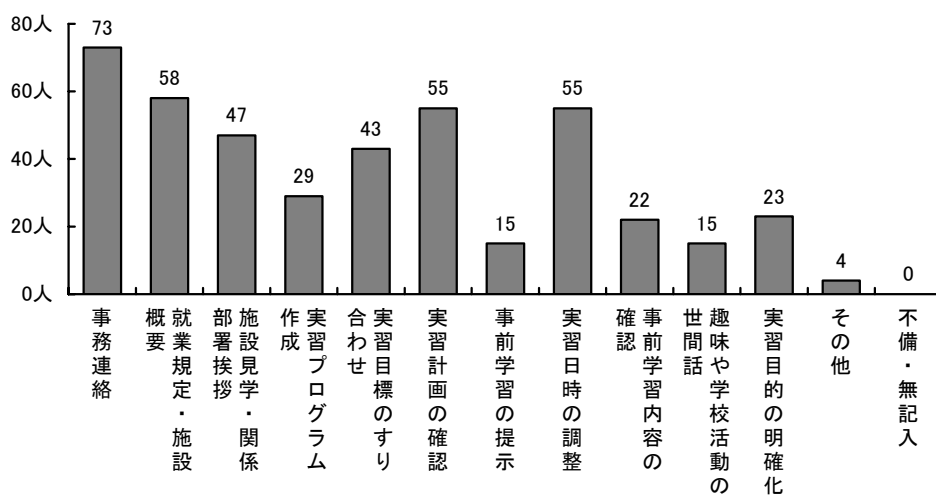


図10 事前訪問の内容

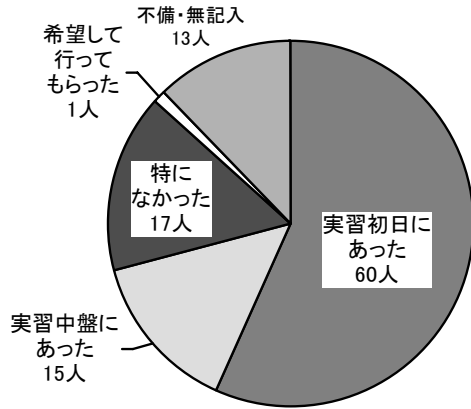


図11 実施開始後オリエンテーションの有無

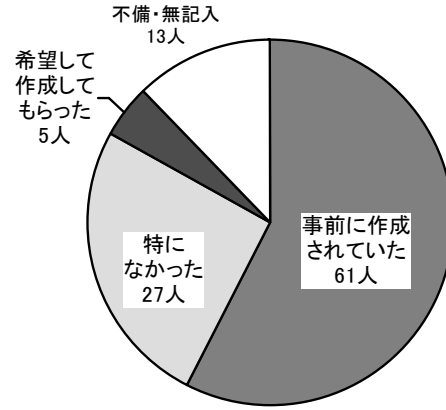


図12 実習プログラムの有無

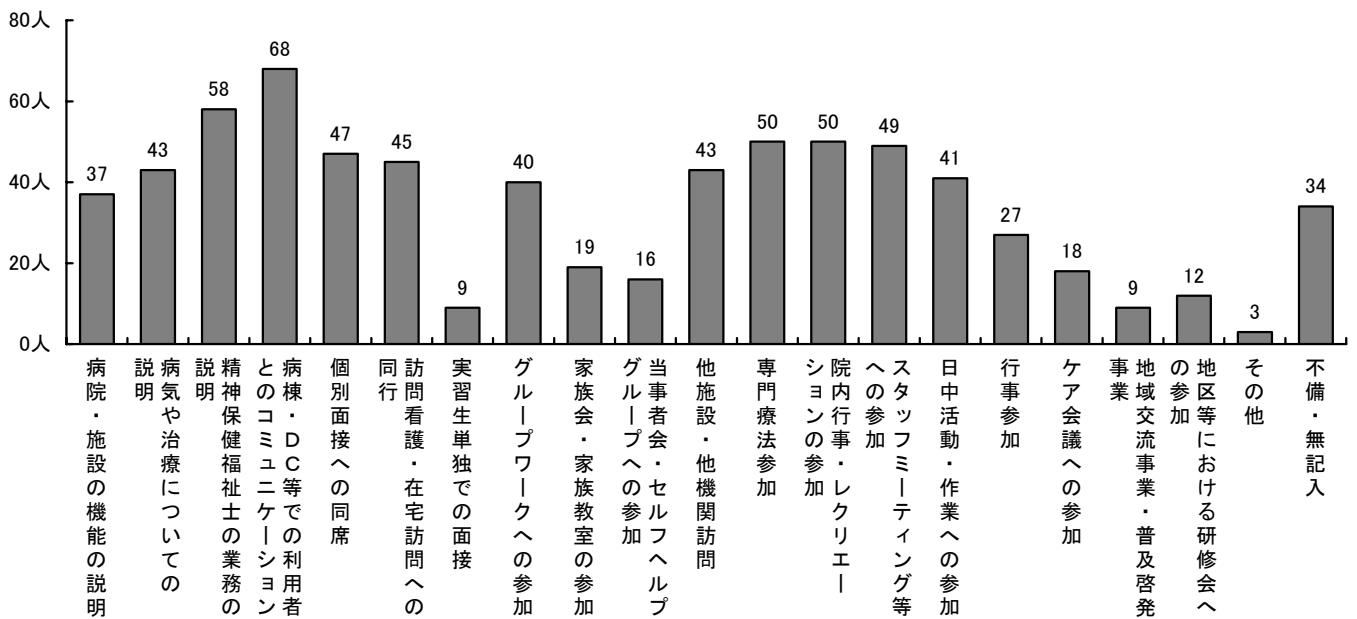


図13 医療機関で経験した実習プログラム

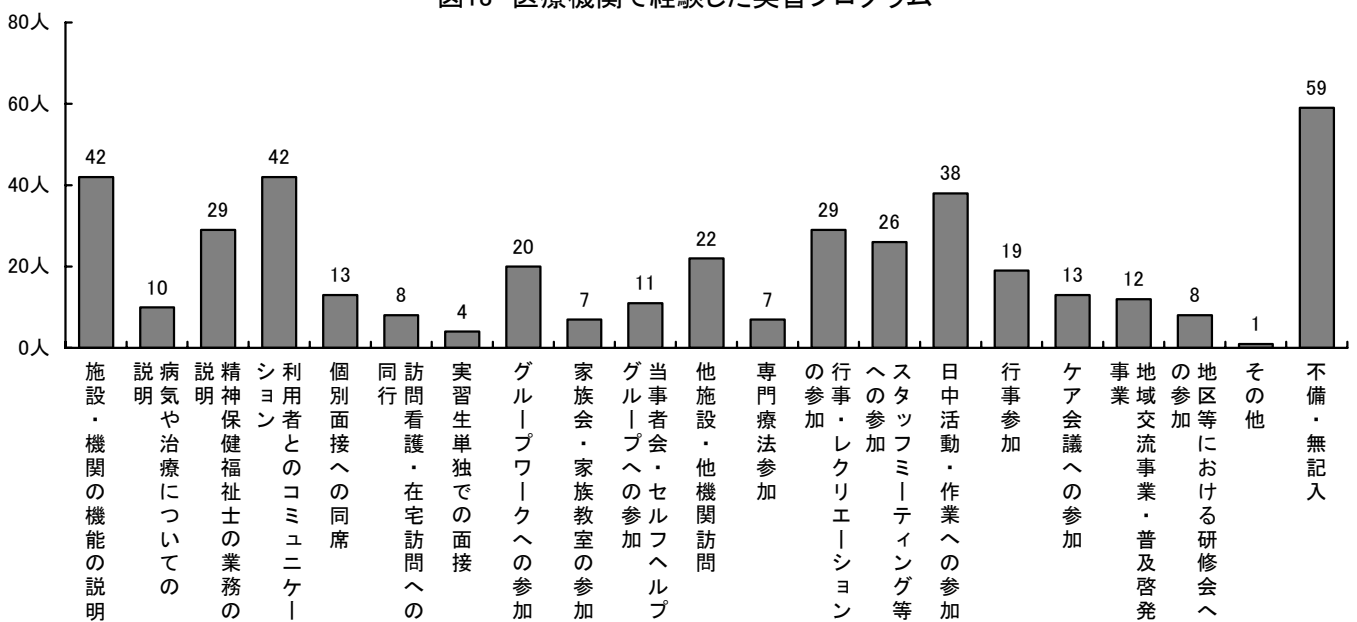


図14 施設・行政機関で経験した実習プログラム

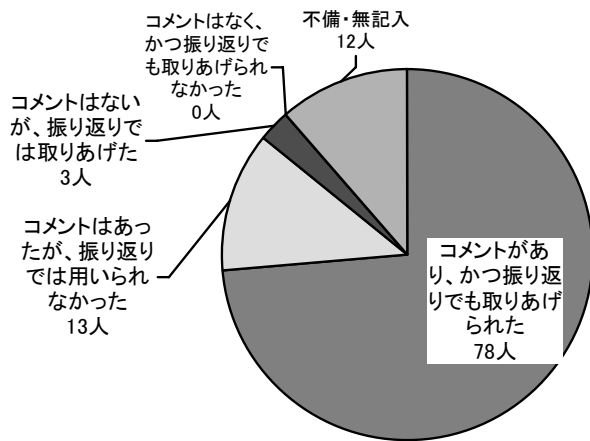


図15 スーパービジョン時における実習記録の活用方法

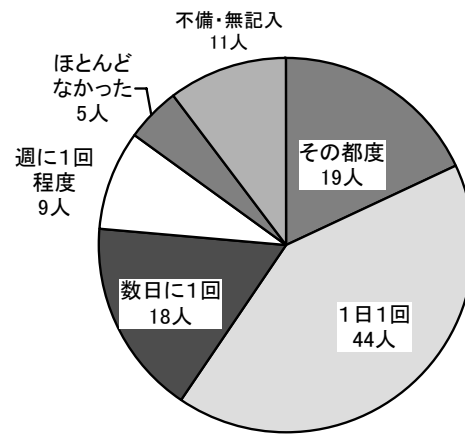


図16 スーパービジョンの頻度

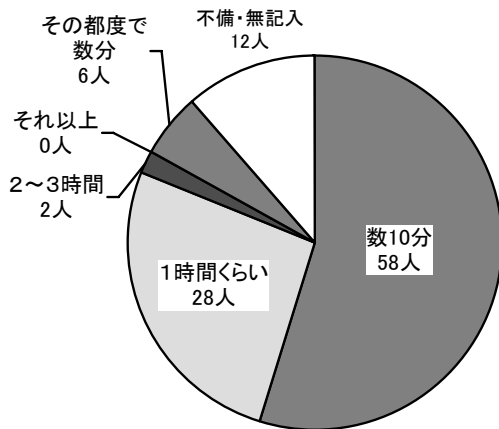


図17 スーパービジョンの時間

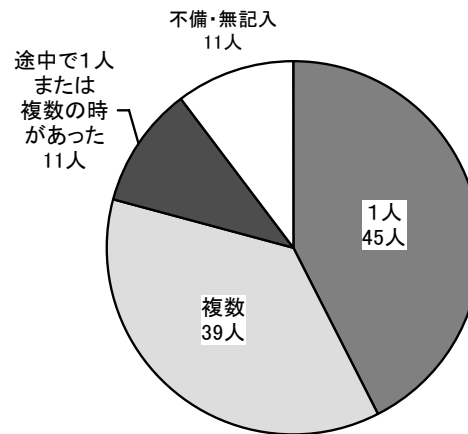


図18 実習期間中の実習生の数

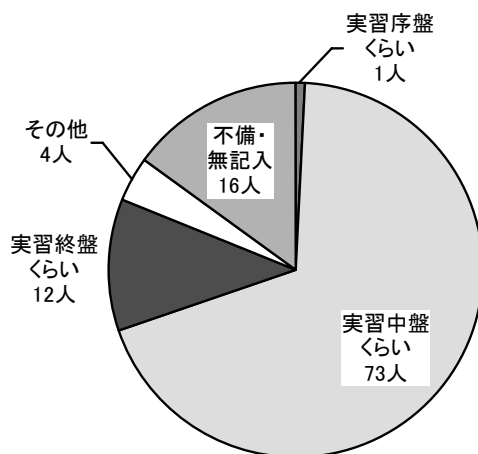


図19 教員の巡回指導の時期

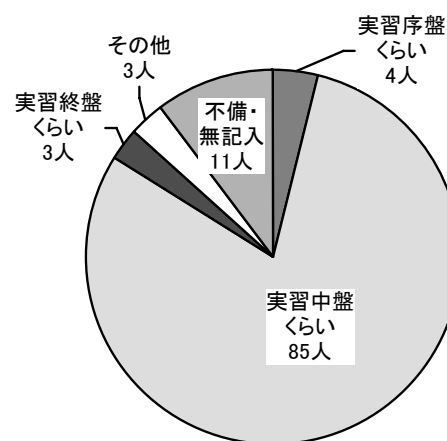


図20 教員の巡回指導の適切時期

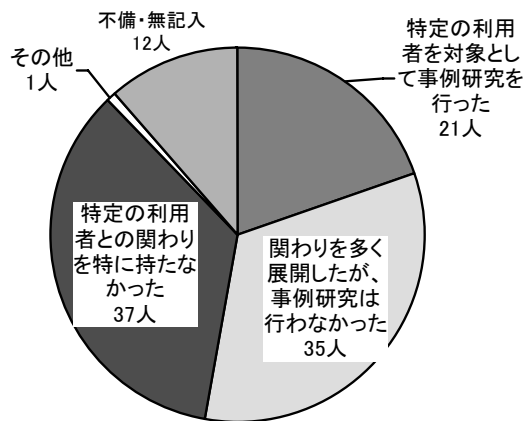


図21 個別担当機会の有無

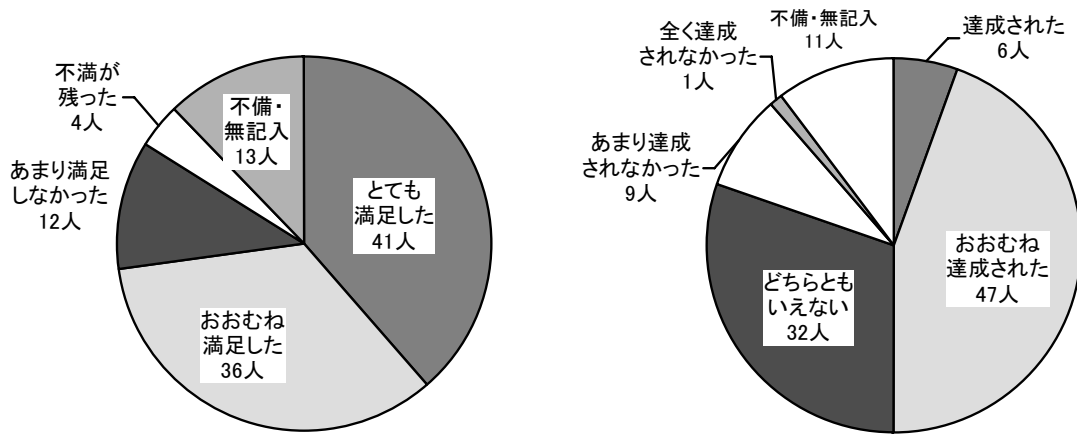


図22 実習の満足度

図23 実習目標や課題の達成度



### (3)現在の精神保健福祉援助実習の現状

図 24 には、所属機関の実習生受け入れ状況を示した。61 名 (57.5%) が「受け入れている」と回答し、45 名 (42.5%) が「受け入れていない」と回答している。図 25 には、実習生を受け入れていると回答した者に対して、体験した実習プログラムの現在の活用状況を示した。活用「している」との回答が 20 名 (38.5%)、「特にしていない」との回答が 32 名 (61.5%) であり、活用していないとする回答が多かった。

図 26 は、現在受け入れていないと回答した者に今後、実習生を受け持ちたいと希望するかどうかを聞いた結果を示した。受け持ちたいと「思う」との回答が 15 名 (38.5%) であり、受け持ちたいと「思わない」との回答が 5 名 (12.8%)、「分からない」との回答が 19 名 (48.7%) であった。

実習体験による現在の精神保健福祉士業務への影響の有無を尋ねたところ、87 名 (89.7%) が「与えている」と回答している (図 27)。

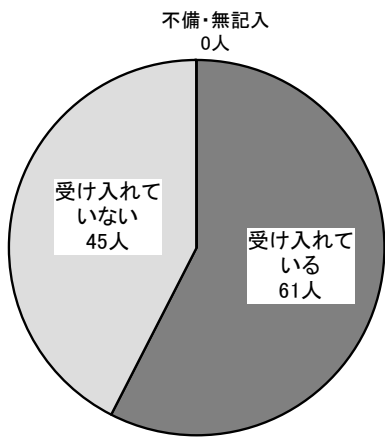


図24 現在の職場での実習生の受け入れ状況

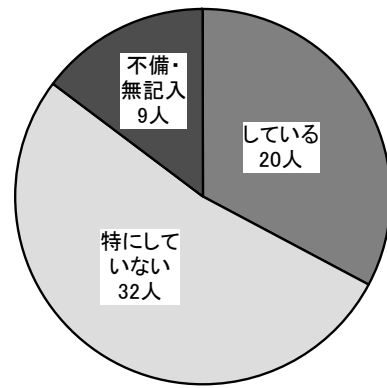


図25 体験した実習プログラムの活用状況

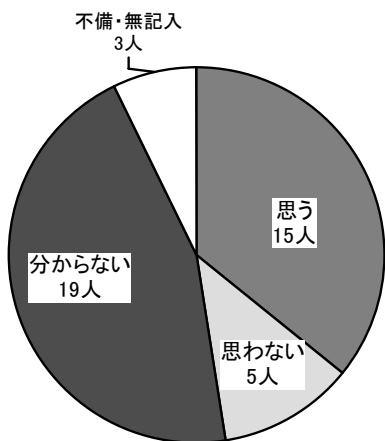


図26 今後の実習生受け持ち希望

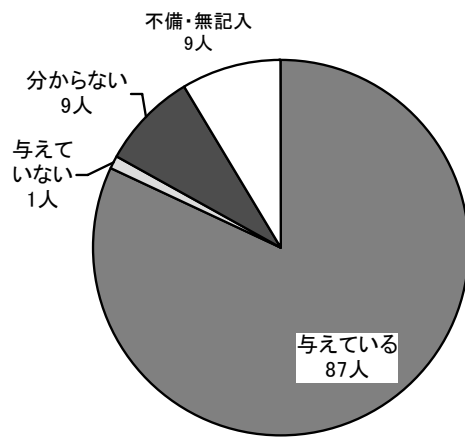


図27 実習体験の精神保健福祉士業務への影響の有無

#### (4) 実習満足度と各項目の関連

自らの実習体験の満足度が、現在の精神保健福祉士業務と、今後の実習指導希望にどのように関連しているかをみるために、表3には、実習満足度と現在受け入れていないと回答した者が今後の実習生の受け持ちを希望するかどうかのクロス表を記した。37名のうち、「分からない」とする者が18名、「思う」とする者が14名で、満足度との関連は明確ではなかった。次に、実習満足度と現在の精神保健福祉士業務への影響の有無をクロスさせてみたところ、実習に「とても満足した」者41名の全てが現在の業務に影響を「与えている」とする回答を示していたのを始め、実習の満足度に関わらず、9割の者が実習体験が現在の業務に影響を「与えている」と回答している（表4・表8）。

表5には、実習満足度と体験プログラムの活用状況のクロス表を記した。満足度とのプログラム活用の間に関連性は認められず、むしろ「特にしていない」との回答が半数以上を占めていた。次に、実習満足度とスーパービジョンの頻度のクロスについて見たところ、スーパービジョンの頻度が確保されているほど、実習満足度も高いことが示されていた（表6・表8）。最後に実習満足度とスーパービジョンにかけた時間をクロスしたところ、数10分～1時間程度の枠組みにおいて、実習満足度の高い者の占める比率が高かった（表7）。

表3 実習の満足度と今後の実習生受け持ち希望のクロス表

度数		今後の実習生受け持ち希望			合計
		思う	思わない	分からない	
表3 実習 の満 足度	とても満足した	8	2	6	16
	おおむね満足した	2	2	9	13
	あまり満足しなかった	3	1	2	6
	不満が残った	1	0	1	2
合計		14	5	18	37

表4 実習の満足度と影響の有無のクロス表

度数		影響の有無			合計
		与えている	与えていない	分からない	
表4 実習 の満 足度	とても満足した	41	0	0	41
	おおむね満足した	31	0	5	36
	あまり満足しなかった	9	1	2	12
	不満が残った	2	0	2	4
合計		83	1	9	93

表5 実習の満足度と体験プログラムの活用のクロス表

度数		体験プログラムの活用		合計
		している	特にして いない	
表5 実習 の満 足度	とても満足した	12	9	21
	おおむね満足した	8	14	22
	あまり満足しなかった	0	3	3
	不満が残った	0	2	2
合計		20	28	48

表6 実習の満足度とスーパービジョンの頻度のクロス表

度数

		スーパービジョンの頻度					合計
		その都度	1日1回	数日に1回	週に1回程度	ほとんどなかった	
表6	とても満足した	12	23	4	2	0	41
実習	おおむね満足した	5	18	9	4	0	36
の満足	あまり満足しなかった	1	2	4	2	3	12
度	不満が残った	0	0	1	1	2	4
合計		18	43	18	9	5	93

表7 実習の満足度とスーパービジョンの時間のクロス表

度数

		スーパービジョンの時間				合計
		数10分	1時間くらい	2~3時間	その都度で数分	
表7	とても満足した	23	15	2	1	41
実習	おおむね満足した	22	10	0	4	36
の満足	あまり満足しなかった	9	1	0	1	11
度	不満が残った	4	0	0	0	4
合計		58	26	2	6	92

表8 分散分析

		平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
実習生受け持ち希望	グループ間	3.753	3	1.251	1.484	.237
	グループ内	27.814	33	.843		
	合計	31.568	36			
実習体験の影響	グループ間	4.979	3	1.660	5.250	.002
	グループ内	28.139	89	.316		
	合計	33.118	92			
体験プログラムの活用	グループ間	1.433	3	.478	2.054	.120
	グループ内	10.234	44	.233		
	合計	11.667	47			
スーパービジョンの頻度	グループ間	34.264	3	11.421	14.312	.000
	グループ内	71.026	89	.798		
	合計	105.290	92			
スーパービジョンの時間	グループ間	2.257	3	.752	.689	.561
	グループ内	96.047	88	1.091		
	合計	98.304	91			

### 3. 考察

#### (1) 調査対象者の概況

対象は精神保健福祉士業務に就いて2年未満の構成員であり、一般的には30歳未満の年齢層によって占められると思われていたが、調査対象者全体の58.5%程度であった。いくつかの要因が考えられるが、受験資格を福祉系4年制大学で取得した者と一般・短期養成校で取得した者が同数であることから、他の業種に就いていた者や無資格で働いていた者が改めて国家資格を取得したことによる影響が大きいと思われる。

回答者のうち、1か所で実習した者が約6割にあたる59名、2か所が29名の約3割で大半を占めていたが、実習の期間は半数以上が12日、23日以上は4割に留まっていた。実習の事前学習においては、自主的な学習を行った者は39名であるのに対して、指示された内容のみ学習した者は44名でこれを上回っている。

#### (2) 実習体験の実態

本調査では、回収率が35%程度であり、かつ無記入項目も多く、これを以って実態を示しているとは即座に判断することは難しい側面がある。但し、実習事前オリエンテーションは約9割実施されている反面、実習開始後のオリエンテーションは「実習中盤にあった」「特になかった」が32名に及んでおり、実習中の受け入れ側のマネジメント意識がどれほど明確であるか、詳細な分析が求められるところである。このことは実習プログラム作成においても、27名が「特になかった」、5名は「希望して作成してもらった」とあり、回答者の約3割については、あらかじめ実習プログラムが用意されていなかったという結果にも影響として出ていると考えられる。

実習で体験したプログラムは、「利用者とのコミュニケーション」と「施設・機関の機能の説明」が多く、実際に利用者と交流する場面は保証されていることがわかる。また、「個別担当」は約4割が持たなかったと回答し、個別担当の上、事例研究を行った者は21名(22.3%)と多くはなかった。

以上のことから、利用者と直接かかわり、活動をとにもする機会は提供されているが、個別担当の上、じっくり特定の利用者との関係を深める経験はむしろ少数であることが分かった。

#### (3) 実習スーパービジョンの実際

実習スーパービジョンにおける日誌の活用については、回答者の8割以上からコメントの記載とともに活用されているとの回答が得られていた。半数近くは1日1回、数10分から1時間程度のスーパービジョンを受けていることも明確となった。なお、実習に対する満足度とスーパービジョンの頻度には相関関係が見られており、実習中、例えば数10分であれ、指導者がどれだけ実習生と頻繁にかかわりを持つかが、満足度に影響することを指摘しておきたい。

しかしながら、実習におおむね満足している者が約8割を占める反面、実習目標や課題が達成されたかどうかを尋ねると、41名(43.2%)は「どちらともいえない」「あまり達成されなかった」と答えており、ここの差について今後、分析・検討が求められていると思われる。

#### (4) 実習と現在の業務との関連

現在、実習生を受け入れているかどうかの問いについては、「受け入れていない」と回答した者が45名(42.5%)と高率であった。しかしながら、経験年数を考慮するとむしろ職場環境や上司の考え方等の影響によるところが大きいと予測される。また、受け入れているとの回答者についても、自らの実習体験プログラムを活用できる立場にあるか否か、という点に配慮すると、直接の関連性を導き出すことはできないであろう。受け入れていないとする回答者に「今後受け持ちたいか」との設問に「分からない」という返答が少なからず存在する。これに関しても、現実感が伴っていないことや、自身に指導を行う力量があるかを吟味している影響が反映されていることが推察される。しかしながら実習体験が、回答者個人の業務上に与える影響は大きく、満足度に関わらず9割の回答者が影響を与えていると答えている。

これらをまとめてみると、実習体験は、その後実務に就いた精神保健福祉士の業務に少なからず影響を与えているということ、実習自体への満足度は一定の数値によって示されているが、そのことと実習課題達成とはかならずしも直結はしていないと考えられる点が導きだされる。したがって、今後、ある程度体系化された実習プログラムの形成や指導者のスーパービジョンに対する認識と力量を蓄えていくことが求められるであろう。